撮影場所◎山形県産業科学館（山形市）

奏であう人 vol.89

宇宙がひらく希望、子どもたちと築く山形の未来

山形における宇宙の利活用と普及啓発を行う「宙の種（そらのたね）」の責任者亀井信一さんと、国際宇宙ステーションでの経験を生かし、宇宙技術の可能性と、宇宙から描く山形の未来をお聞きしました。



1985年東京都生まれ。鶴岡市在住。国際宇宙ステーションの「きぼう」日本実験棟の実験運用管制官として、つくば宇宙センターにて宇宙実験の運用に携わる。鶴岡市への移住後、2016年に鶴岡スペースステーションを立ち上げ、2020年からは「庄内から宇宙へ！」と題したイベントを定期開催。多くの人々に、宇宙の魅力と可能性を伝えている。



鶴岡スペースステーションが企画し、国際宇宙ステーション（ISS）に滞在する宇宙飛行士・油井亀美也さんとリアルタイムでの交信を実施。山形と宇宙を結んだ交信は初となり、参加した子どもたちが宇宙を身近に感じる機会となった。



1960年新庄市生まれ。千葉県在住。1986年東北大学大学院修了後、三菱総合研究所に入社。宇宙実験、分子ナノテクノロジー実験、研究開発戦略や科学技術政策などに従事。政策・経済研究センター長、研究理事を経て、2024年より山形大学寄附講座教授に就任。宇宙産業開発ゼミ「宙の種」を開設し、人工衛星などの利活用プロジェクトを企画。



山形の子どもたちの夢や願いを電子データ化し、人工衛星とともに宇宙へ届けられるベニバナ・サット「宙の種Letter」プロジェクト。集められた思いは、1年間地球を巡ったのち、地球の重力に導かれて大気圏へ突入し、流れ星になる。

心にあった宇宙への想いが再び動きはじめる

亀井さんが宇宙にひかれた原点は、子どもの頃リアルタイムで見たアポロ11号の月面着陸でした。

「夜に空を見上げると、いつも同じ月がありました。でもそこには今、人がいる。子どもながらにそのことにとても感動したのです」。

大学院修了後、国際宇宙ステーションで行う実験の考案や、宇宙空間を利用した材料研究などに携わった亀井さん。その後、宇宙の仕事から長く離れていましたが、山形大学（一財）森の学校寄附講座への招聘を機に、その想いが再び動きはじめます。

「宇宙の仕事からしばらく離れていましたが、山形に来て、もう一度やってみようと。そこで始めたのが超小型人工衛星と宇宙の利活用を発掘するプロジェクトです」。

一方、佐藤さんは中学生の時に気象について学んだ授業をきっかけに、空のさらにその向こうにある宇宙へと興味が広がったと言います。

「思春期でいろいろ悩むこともありましたが、空を見上げて宇宙のことを考えると、自分の悩みなんてちっぽけだなと思って。気持ちが軽くなったんです」。

大学で物理学を学んだ後、電源メーカーに就職。宇宙航空研究開発機構（JAXA）との仕事を通じて宇宙への思いが再び芽生え、やがて国際宇宙ステーションの「きぼう」日本実験棟の運用に携わる企業へ転職、その後実験運用管制官となりました。

「宇宙に関する仕事がしたいという気持ちを持ち続けていたら、少しずつ道がつながっていきました」。

東日本大震災後に暮らしを見つめ直し、仕事が一段落した後、鶴岡市へ移住。地域の人にも宇宙の魅力を知ってほしいと始めた小さな観測会は、「鶴岡スペースステーション」の活動へと広がっていきました。

宇宙を入り口に山形の可能性を広げる

「『宙の種（そらのたね）』で見据える最終的な目的は、宇宙を舞台に山形でこれをどう使うか。たとえば衛星データの利活用は、より高い付加価値を生み出します。現在、超々小型人工衛星のプロジェクトを始動中ですが、これらを契機に将来、山形に宇宙産業が育てば、人材が集まり、明るい未来につながると考えています。」と亀井さんは言います。

佐藤さんが大切にしているのは、宇宙をもっと身近なものとして子どもたちに届けることだと言います。

「鶴岡には、科学や宇宙に触れられる施設がそれほど多くありません。でも私は、住んでいる場所は関係ないと思っています。どこにいても宇宙の情報に触れられる時代。昨年は観測会や宇宙飛行士とのオンライン交流などのイベントを行いました。参加してくれた子どもの中に、将来は宇宙飛行士になりたいと言ってくれる子も出てきました。そういう言葉を聞くとうれしいですね」。

微笑む佐藤さんに亀井さんが笑顔で応えます。

「明るい未来を創るのは、子どもたち自身です。私たちは、子どもたちに宇宙への憧れや好奇心の種をまき、未来の可能性を広げる機会も提供しています」。

亀井さんの言葉に佐藤さんがゆっくりと言葉を重ねます。

「山形には頑張っている人たちがたくさんいます。山形にいても挑戦できる、夢を持てるんだということを伝えたいと思っています」。

宇宙へ挑む技術と次代を育む学び

「実は、山形にはJAXAと取引のあるものづくり企業が数多くあります。しかし、主戦場は宇宙をどう使うのかに移りつつあります。宇宙関連のソフトウエア産業が山形に根付いていけば、より多くの人をひきつけ、元気な山形につながると思っています。」と話す亀井さんに佐藤さんが応えます。

「宇宙をきっかけに何かに興味を持ったり、やってみたいことを見つけたりしてくれたらうれしい。未来をつくる人を、地域のみんなで育んでいけたらいいですね」。

宇宙を新ビジネスの場としたい亀井さんと、宇宙を身近な学びとして届ける佐藤さん。二人が見つめている先には、山形の未来があります。